ヘフリガー/日本の歌曲を歌う(ドイツ語訳による)(第2集)
Ernst Haefliger Singt Japanische Lieder (Heft II)

1 野薔薇(三木露風作詞/山田耕筰作曲) [1:40]
Heidenröslein (R. Miki – K. Yamada)

2 中国地方の子守歌(日本古謡/山田耕筰作・編曲) [2:36]
Wiegenlied aus Westjapan (Anon – K. Yamada)

3 夏の思い出(江間章子作詞/中田喜直作曲) [3:02]
Erinnerung an Ose (S. Ema – Y. Nakada)

4 浜千鳥(鹿島鳴秋作詞/弘田龍太郎作曲) [2:22]
Regenpfeifer am Strand (M. Kashima – R. Hirota)

5 ゴンドラの唄(吉井勇作詞/中山晋平作曲) [3:45]
Gondellied (I. Yoshii – S. Nakayama)

6 ちいさい秋みつけた(サトウハチロー作詞/中田喜直作曲) [3:54]
Vom Herbst ein Stückchen (H. Satou – Y. Nakada)

AIYANの歌(北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Lied einer Dienstmagd (H. Kitahara – K. Yamada)

7 i. Noskai(遊女) [1:57]
i. Kurtisane

8 ii. かきつばた [1:58]
ii. Schwertlilien

9 iii. AIYANの歌 [1:27]
iii. Lied einer Dienstmagd

10 iv. 曼珠沙華 [7:13]
iv. Die Totenblumen

11 v. 気まぐれ [2:39]
v. Laune

12 宵待草(竹久夢二作詞/多 忠亮作曲) [1:00]
Die Mondblume (Y. Takehisa – T. Oono)

13 月の沙漠(加藤まさを作詞/佐々木すぐる作曲) [4:17]
Durch die Wüste (M. Katou – S. Sasaki)

14 叱られて(清水かつら作詞/弘田龍太郎作曲) [3:55]
Heimweh (K. Shimizu – R. Hirota)

15 漁夫の娘(フォンターネ作詞/山田耕筰作曲) [2:30]
Das Fischermädchen (Fontane – K. Yamada)

16 愛する人に(メーリケ作詞/山田耕筰作曲) [4:37]
An die Geliebte (Mörike – K. Yamada)

17 あわて床屋(北原白秋作詞/山田耕筰作曲) [2:16]
Der allzu hastige Barbier (H. Kitahara – K. Yamada)

18 唄(三木露風作詞/山田耕筰作曲) [1:37]
Uta (R. Miki – K. Yamada)

原盤:SSP / En-da

〔ボーナス・トラック〕
(1993年11月1日大阪ザ・シンフォニーホールにおけるライヴ)

19 夏の思い出(江間章子作詞/中田喜直作曲) [3:20]
Erinnerung an Ose (S. Ema – Y. Nakada)

20 叱られて(清水かつら作詞/弘田龍太郎作曲) [4:40]
Heimweh (K. Shimizu – R. Hirota)

21 唄(三木露風作詞/山田耕筰作曲) [2:20]
Uta (R. Miki – K. Yamada)

エルンスト・ヘフリガー(テノール)
ERNST HAEFLIGER (Tenor)

イリーナ・ニキーティナ(ピアノ)
IRINA NIKITINA (Piano)

ドイツ語訳:村上紀子&マルグリット・畑中(1-14, 17, 19, 20)
German-lyrics translators : Noriko Murakami & Dr. Margrit Hatanaka

歌唱:ドイツ語(1-17, 19, 20)、日本語(18, 21)
Sung in German, Sung in Japanese

録音:1993年5月3日-5日 スイス、ブルーメンシュタイン教会(1-18)
1993年11月1日 大阪ザ・シンフォニーホール(ライヴ)(19-21)

Producer: Michael Haefliger
Recording Engineer: Dr. Peter Wangard
Editing Engineer: Anton Lanz

日本歌曲を日本語ばかりにしておいては勿体ないという話

国には国それぞれの、民族には民族それぞれの、言葉がある。

言葉は、観光写真を眺めたり、歴史をひもとくよりも、もっと多くを教える。フランス語を知れば、国の気質まで分かる。中国語を学べば、民族の文化・伝統の本質にまで考えが及ぶ。

日本のことを伝えたかったら、富士山や東京の街並みの写真よりも、当然、日本語である。口型・舌位置のはっきりした、アイウエオという5つの単純な母音は、簡潔や質素や清きあかき心を重んじてきた、日本の伝統の反映である。また、あまりに豊富すぎる婉曲表現の実相を分かって貰えば、日本人の曖昧な微笑みが、決してだらしない国民性を象徴するものではなく、比較的狭い国土と生活圏で、いつも顔を付き合わせ、下手をすると喧嘩しがちになる状況を緩和するための、工夫され、洗練され尽くした文化なのだと、実感されてもくるだろう。

だから、日本語を、ひとりでも多くの外国人が知ってくれればいい。音楽なら、平家琵琶や謡曲や長唄や清元を、そして近代日本の歌を覚えてくれたらいい。話は自ずとそうなるだろう。けれども、この正論を通すのは、なかなか厳しい。

21世紀初頭、世界の人口は約65億人と推計されている。うち、日本語を母語とする者は約1億3000万人居る。つまり人類の約50人にひとりは日本語を話す。大したものである。

ところが、その1億3000万の所在はというと、言うまでもなく、ほとんど日本国だけなのだ。広がりがない。孤立し、閉鎖している。

もっとも、そのこと自体は大した問題ではない。単に日本人しか使わないせいで、孤立し、閉鎖しているなら、改めて外国に広めればいい。覚えてもらえばいい。

しかし、本当の難題は、この先にある。日本語が孤立し、閉鎖しているのは、通用範囲だけではない。言語それ自体が、孤立し、閉鎖しているのだ。

どういうことか。日本語はウラル・アルタイ語族の一言語だと、内外の学者によって広く説かれた時代が、明治以来、長くあった。ウラル語族には、フィンランド語やハンガリー語などが、アルタイ語族には、トルコ語、モンゴル語、朝鮮語などが属するとされた。日本語もこの仲間だとすれば、閉鎖し、孤立するどころではない。兄弟語は、ユーラシア大陸のほぼ端から端まで、数珠つなぎになる。

すると、それらの言葉は、何をもって兄弟語なのだろうか。似た特徴があるからである。前置詞を用いず後置詞を使うとか、動詞の変化は語幹に助動詞のようなものをくっつけて行うとかいったことである。

が、現代の学問では、その程度の共通点だけでは、同じ語族に属すると認めなくなった。大事なのは音韻対応である。たとえば、夢のことを英語で dream、ドイツ語で traum といい、飲むことを英語で drink、ドイツ語で trinken という。このように、英独2ヵ国語にはdとtが対応して同意味になる単語が数多い。これが同族の証明になる。

ウラル・アルタイ語族と呼ばれた諸言語のあいだには、この音韻対応が上手にみいだせない場合が多い。それゆえ、この語族の存在には、今日、疑問符がつくありさまだ。しかも、日本語に関して言えば、同じアルタイ語族の中でも地理的に近い、朝鮮語やモンゴル語とさえ、音韻対応がみつからない。

音韻対応がないということは、互いが言葉を聞いても、近しさをみつけにくく、意味もなかなか分からないということだ。日本語は、世界のどこの国や地域の言葉と兄弟なのか分からず、日本人以外の誰が聞いても、親しさをじゅうぶんに感じられない言葉なのだ。極端な言い方をすれば、極東の孤児である。日本語の祖先は実はドラビダ語だの何だのと、様々な説が行われているが、それはつまり、孤児だからどうしても親探しをしたくなるということだ。それだけ哀しい身の上なのだ。

とすれば、日本歌曲を日本語で海外に広める試みには、やはりつらさが伴う。日本歌曲は、日本語の響きや抑揚と結びついて作曲されているのだから、外国にも日本語で広まってほしい。これが日本人としての切なる希望である。しかし、言葉が特殊で、隣の国とさえ類縁性に乏しく、国際性を主張できないとなれば、妥協もやむを得まい。日本歌曲を日本語に縛っておいては、百年たっても二百年たっても、日本人相手にしか通用しない。孤立した日本語の宿命である。英語やドイツ語やイタリア語のように、世界中で原語で歌えとはいいにくい。

そもそも、日本歌曲は、五線譜にピアノなりの伴奏で書かれているのだ。幾ら、日本語と密着しているといっても、西洋と出会ってからの日本人の感性が生み出したものだ。伝統音楽よりは遥かに、外国語への翻訳を許容する性質のものである。音楽として汎用性が高い。翻訳すれば、立派な「輸出品」になる。

歌は言葉の意味が大事だ。翻訳によって意味がじかに伝わり、そこからとっつけば、日本語という原語への興味も新しく湧いてくるかもしれない。日本歌曲は、とりあえず、英語にもフランス語にも中国語にも訳され、このCDのように名歌手にうたってもらうべきだ。ヘフリガーはドイツ語でである。いったんよいドイツ語歌詞が定着すれば、ドイツ語の兄弟語の、英語や北欧諸語やオランダ語への置き換えも進むだろう。

日本歌曲は日本語でこそ。その通りである。しかし、海外での日本と日本語への興味を喚起するためにも、いったんよその言葉になってくれるのがいい。このCDはそのための偉大な里程標である。

〔片山杜秀〕

野薔薇

大正６年８月25日の作曲。山田耕筰のところに函館の修道院にいた三木露風から、トラピストの絵はがきが来たが、その余白にこの詞が書きつけられていたので、耕筰がそれにメロディをつけたものという。耕筰としてはまだ初期の作品であるが、アンダンテ・カンタービレの可憐な伴奏の上に、比較的高音域の素朴な旋律が二度くり返され、新鮮な北海道の野薔薇の美しさを見事に描き出している名曲。

中国地方の子守唄

山田耕筰が昭和３年４月に芸術歌曲として発表したものだが、元唄は岡山県西南部の旧山陽道周辺に江戸時代から伝わる素朴な民謡「ねんねん守の唄」である。井原市高屋町出身のテノール歌手上野耐之（よしゆき）が、同年の春季皇霊祭の日〝私の故郷にこんな子守唄があるのだが〟と耕筰に歌って聞かせた。〝いいメロディだから伴奏をつけて歌曲に仕上げてみよう〟という話に発展し、上野の唄をその場で五線紙に採譜したのだった。

夏の思い出

毎年５月から６月頃になると季節の名曲として良く聞かれる歌で、昭和24年６月13日から石井好子が創唱して放送したNHKラジオ歌謡。爽やかで、ちょっぴりもの悲しく、詞の持つ美しい抒情をそのまま表現した中田喜直のメロディ。中田はそれまでは一度も尾瀬に行ったことはなかったが、詞を見た瞬間、女性にぴたりの美しい旋律作りを考え、作曲はイマジネーションの産物だから、尾瀬に行ったことはなくても大丈夫と、曲作りを引き受けた。

浜千鳥

大正９年の発表。３拍子のメロディは、日本伝統の典型的な五音音階と西洋の作曲手法とを見事に融合させた傑作で、波のうねりを思わせるような盛り上がりと、親を慕う感傷の情が美しく溢れた抒情小曲である。流麗なメロディはハープをイメージさせる分散和音の伴奏にのって、青い月夜の浜辺の千鳥の情景を巧みに描いている。哀切な歌詞とメロディは日本人の心にしみこむ美しさがあって、冬の名曲として、よく知られている。

ゴンドラの唄

大正４年４月、芸術座公演の『その前夜』の劇中歌で、ヴェネツィア民謡風な歌という依頼を受けた吉井勇は、詩章を作るに際し、森鷗外訳、アンデルセンの『即興詩人』の章句がとっさに浮かんだ。それを下敷きにして、絶望と享楽をないまぜ、デカダンな青春を哀愁をこめて美しく謳いあげる恋の讃歌を書いた。作曲の締め切りが目前に迫った日「ハハキトク　スグカエレ」の電報を受け取り、中山晋平は長野県へ帰郷の列車の中でこの曲をまとめたという。

ちいさい秋みつけた

そぞろ身にしむ秋風と共に音もなく忍びよるこまやかな秋の気配を、サトウハチローならではのデリカシーな神経で〝ちいさい秋みつけた〟と気のきいた表現で捉えている。中田喜直の曲は、従来の感傷趣味から完全に脱却して、十二分に詞を生かして素晴らしい抒情をたたえている。昭和30年11月３日、NHK放送記念祭「秋の祭典」の折、NHKでは第一線の作詞・作曲家12人に委嘱して６曲の新しい歌を発表したが、その時の歌ではこの一曲のみが後世に残った。

AIYANの歌

1. Noskai（遊女）　2. かきつばた　3. AIYANの歌　4. 曼珠沙華　5. 気まぐれ

「AIYANの歌」は全５曲からなる歌曲集で、北原白秋・山田耕筰の二人が初めてコンビを組んだ歌だった。耕筰は大正11年から白秋と組んで、エッセイや歌曲の発表を行った。この連作歌曲は、白秋の青年時代の詩集『思ひ出　抒情小曲集』（明治44年初版）に収められた「柳河風俗詩」から歌詞を得、「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」と「気まぐれ」が大正11年５月14日に、「Noskai」と「AIYANの歌」が翌15日に、「かきつばた」が３日後の18日に作曲されている。日本語と日本の旋律との融合に悩んでいた耕筰は、白秋と知り合ってから、如何にして日本語の詞が日本語で歌われるべきかのあり方を生み出した。「風によせてうたえる春の歌」（三木露風詞）とともに、耕筰の連歌歌曲の双璧をなすといわれている。AIYANは白秋の生地・福岡県柳河地方の方言で子守女を指し、NOSKAIは遊女という意である。歌詞に出てくるONGOは良家の娘、UNTEREGANはあん畜生、Odan mo iya, Tinco Salはあら厭だよ、まあ！という意である。

４曲目の「曼珠沙華」は、よく独立して歌われることが多い。曼珠沙華は秋の彼岸の頃、田のあぜ道や土手などに群生し、真っ赤な花を咲かすところからこの名があるが、墓地に多く、その花の色に血のイメージを重ねることも多い。子供を失った母親が墓参りをする哀しみを詠ったもので、母親の愛情が迫ってくるような名旋律である。

宵待草

三行詩形の短いこの詞は、大正２年11月発刊の竹久夢二の処女詩集『絵入り小唄集＝どんたく』に発表され、宮内省雅楽部でヴァイオリニストの多忠亮（おおのただすけ）が曲付けした。夢二がかつて日本画の手ほどきをしたことのある内山惣十郎は浅草オペラの作家兼歌手だったので、この曲を舞台にかけて歌い、流行のきっかけを作った。センティメンタルな美しい歌で、短いため、プロ歌手の舞台用アンコール曲として評判をとった。

月の沙漠

大正中期から新しい童謡に加わった作曲家の佐々木すぐる（当時31歳）は、この詞を読むや否や、すぐインスピレーションが湧いて美しい東洋的な曲ができた。日本語の三音以上の単語には元々頭高型が少ないし、それも三音の形容詞が少ない。これが文語となると〝高き〟でも〝白き〟でも頭高型だが、口語だと〝高い〟でも〝白い〟でも中高型になる。稀にあるのが〝金の〟とか〝銀の〟とかこの詞に出てくる言葉で、これが今迄のメロディと異なったアウフタクトの曲を生んだ。

叱られて

弘田龍太郎の曲は、詞の美しさを充分に表現して美しく、やさしい情緒が聞き手に伝わってくる。長調で民謡風な旋律だが、少女趣味を超えたたまらなく淋しいエレジー。〜叱られて……の上昇メロディの3連音符を、ひとりでそっと口ずさむように歌うと、涙があふれ出そうなセンティメンタルな気分になる。4拍子だがリズムに変化をもたせてあるので、歌っている方が旋律の美しさにうっとりしていると、リズムがくずれるかなり難しい歌。

漁夫の娘

明治44年5月16日、ベルリンで作曲されたもので、初演は大正3年2月13日、文芸サークル未来社主催の「山田アーベント」でソプラノの三浦環、作曲者のピアノ伴奏だった。詞のTheodor Fontane（1819−1898）は、1870年代以降ベルリンで生活した作家であり、批評家でもあった。この曲はピアノ伴奏版とオーケストラ伴奏版があるが、オーケストラ伴奏版は紛失し、全く失われた。

愛する人に

大正4年2月1日から3日にかけて作曲されたもので、耕筰はドイツ語の詞による歌曲を2曲作っている。ベルリンに滞在していた恩師の幸田延（1870−1946）から、メーリケの詩集1冊を贈られ、この曲は同年11月21日、帝国劇場での東京フィルハーモニー会管弦楽部第5回公開試演音楽会で、当時耕筰の夫人だった山田（永井）郁子によって創唱された。

あわて床屋

大正8年、『赤い鳥』が一周年記念の音楽祭を開催した際に発表した詞で、その時の曲は石川裟拙だった。山田耕筰が北原白秋の詞に曲をつけはじめたのは大正11年の秋からで、この曲は翌12年発行の『童謡百曲集』で初登場した。耕筰が楽譜に「のどかに、ひょげて」と記したように、大変コミカルな歌だが、意外にも音程や歌いまわしが難しい。鋏（はさみ）の音の歌詞を効果的に生かしたメロディは、作詞者の白秋も大変気に入っていたという。

唄

山田耕筰はベルリン留学中に三木露風の詩集『廃園』の中から10編を選んで作曲、大正3年に帰国すると『山田歌謡曲集露風の巻』として出版した。これが耕筰の最初の歌曲集だが、「唄」はそれに引き続いて大正5年1月20日に作曲された。前の10曲で得られた日本の詞に対する作曲上の教訓、原詩が持つ語調、アクセント、ニュアンスをいかに生かして旋律をつけるか、という点に細心の注意を払って作られた。同年1月30日の音楽奨励会第19回演奏会「ヤマダ・アーベント」に出演する山田郁子（ソプラノ）のために作曲された。「唄」は、声とピアノによる「蝶々」（ドイツ民謡）変奏曲ともいえ、「蝶々」のモティーフがさまざまのアーティキュレーションで呈示されている。

［長田暁二］

1 NOBARA
Heidenröslein

Heidenröslein, Röslein,
Wie blühst du besheiden und rein.
Wie blühst du so lieblich und süß,
so lieblich und süß.
Wie schön du bist, niemand will's sehn,
du Heidenröslein,
du liebliches Heidenröslein.

Heidenröslein, Röslein,
in Blütenpracht demütig sein:
Gott schuf dich so edel und shcön,
so edel und schön.
Wie du, wenn Gott will, möcht' ich sein,
du Heidenröslein,
du edles Heidenröslein.

野薔薇

野ばら
野ばら
蝦夷地（えぞち）の野ばら
人こそ知らね
あふれさく
いろもうるわし
野のうばら
蝦夷地の野ばら

野ばら
野ばら
かしこきのばら
神のみ旨を
あやまたぬ
曠野の花に
知る教え
かしこき野ばら

2 CHUGOKUCHIHOU NO KOMORIUTA
Wiegenlied aus Westjapan

Schlafe, mein Kindelein, schlafe.
Lieb ist ein schlafendes Kind.
Wach bleiben, schreien, schreien
– eia, schlaf ein –
mag ich nicht, mein Kind.
Eia, schlaf ein,
eia, schlaf ein.
Schlafe, mein Kindelein, schlafe,
denn heute ist dein Feiertag.
Morgen, mein Kindlein, gehn wir
– eia, schlaf ein –
in den Schrein mit dir.
Eia, schlaf ein,
eia, schlaf ein.

Und wenn wir dann in dem Schrein sind,
dann beten wir für dich, mein Kind,
daß du stets gesund bist,
– eia, schlaf ein –
lebenslang gesund.
Eia, schlaf ein,
eia, schlaf ein.

中国地方の子守歌

ねんねこ　しゃっしゃりませ
寝た子の可愛さ
起きて泣く子の　ねんころろん
つら憎さ
ねんころろん　ねんころろん

ねんねこ　しゃっしゃりませ
きょうは二十五日さ
あすはこの子の　ねんころろん
宮詣り
ねんころろん　ねんころろん

宮へ詣ったとき
なんとゆうて　拝むさ
一生この子の　ねんころろん
まめなよに
ねんころろん　ねんころろん

3, 19 NATSU NO OMOIDE
Erinnerung an Ose

Kommt da der Sommer grün,
denke ich zurück
an das Moor in Ose
und das ferne Glück.
Im Nebelschleier weiß

schwebt dein zartes Bild,
schwebt dein zarter Schatten,
Wiesenpfad verhüllt.
Zwischen grünen Moosen
– im Sommer, im Sommer –
stehn die Wasserrosen
und träumen ihren Sommertraum.
Alpenrosenfarben
den Himmel hoch im Blick :
An das weite Ose
denk' ich voll Glück.

Kommt da der Sommer grün,
denke ich zurück
an das weite Ose
und das ferne Glück.
Im Blütenschimmer weiß
schwebt ein fernes Land,
schwebt ein zarter Schatten
bis zum Wiesenrand.
Zwischen grünen Moosen
– im Sommer, im Sommer –
duften Wasserrosen
und träumen ihren Sommertraum.
Sehnsucht im Herzen
und dennoch voller Glück :
An das schöne Ose
denk' ich zurück.

夏の思い出

夏が来れば思い出す
はるかな尾瀬　とおい空
きりの中に浮びくる
やさしい影　野の小路
みず芭蕉の花が
咲いている
夢見て咲いている水のほとり
しゃくなげ色にたそがれる
はるかな尾瀬　とおい空

夏が来れば思い出す
はるかな尾瀬　野の旅よ
花の中にそよそよと
ゆれゆれる　浮き島よ
みず芭蕉の花が
匂っている
夢見て匂っている水のほとり
まなこつぶればなつかしい
はるかな尾瀬　とおい空

4 HAMACHIDORI
Regenpfeifer am Strand

Blaue Nacht im Mondenschein.
Dort am Meeresstrand
rufen nach dem Mütterlein
Vögel klein im Sand.
Kommt ihr aus dem Wellentanz,
aus dem Meere weit?
Blinkend naß im Silberglanz
euer Federkleid.

Klagend in die Nacht hinein
fliegt ihr, voller Weh
suchend nach dem Mütterlein
über der weiten See.
Und das Meer, die Nacht so weit.
Dort im Mondenschein,
Silberglanz im Federkleid :
Regenpfeifer klein.

浜千鳥

青い月夜の　浜辺には
親をさがして　鳴く鳥が
波の国から　生まれ出る
ぬれた翼の　銀のいろ

夜鳴く鳥の　かなしさは
親をたずねて　海こえて
月夜の国へ　消えてゆく
銀の翼の　浜千鳥

5 GONDORA NO UTA
Gondellied

Kurz nur ist des Lebens Frist,
liebe mich, schönes Kind,
so lang' rot dein Mund noch ist
und wir beisammen sind.
Schönes Kind, dein Blut so heiß
bald in Kälte sinkt.
Niemand weiß, o niemand weiß,
was das Morgen bringt.

Kurz nur ist des Lebens Frist,
liebe mich, schönes Kind.
Reichst mir deine Hand gewiß,
steigst in die Gondel ein.
Schönes Kind, die Wange zart,
an der Seite mein.
Niemand kommt, o niemand harrt,
hier sind wir allein.

Kurz nur ist des Lebens Frist,
liebe mich, schönes Kind.
Wellen spiegeln, wie schön du bist,
Gondel schaukelt im Wind.
Schönes Kind, die Rosenhaut
deiner Arme fein.
Niemand sieht uns, niemand schaut,
hier sind wir allein.

Kurz nur ist des Lebens Frist,
liebe mich, schönes Kind,
so lang schwarz dein Haar noch ist
und wir beisammen sind.
Schönes Kind, dein Herz so heiß
bald erlischt im Leid.
Jeder weiß, o jeder weiß,
heute ist nur heut.

ゴンドラの唄

いのち短し、恋せよ、　少女
朱き唇　褪せぬ間に
熱き血潮の　冷えぬ間に
明日の月日の　ないものを
いのち短し、恋せよ、少女
いざ手を取りて　彼の舟に
いざ燃ゆる頬を　君が頬に
ここには誰も　来ぬものを

いのち短し、恋せよ、少女
波にただよひ　波の様に
君が柔手を　我が肩に
ここには人目　ないものを

いのち短し、恋せよ、少女
黒髪の色　褪せぬ間に
心のほのほ　消えぬ間に
今日はふたたび　来ぬものを

6 CHIISAI AKI MITSUKETA
Vom Herbst ein Stückchen

Hat da nicht einer,
hat da nicht einer,
hat da nicht einer wa gehört?
Vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück hab ich
gehört.
Blinde Kuh, wir führen dich,
klatschen in die Hände.
Hör mal zu und spitz die Ohren:
Was ertönt da leise?
Horch da pfeift es von den Bäumen.
Des Herbstvogels Ruf.
Vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen hab ich
gehört.

Hat da nicht einer,
hat da nicht einer,
hat da nicht einer was gespürt?
Vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück hab ich gespürt.
Durch das Fenster meines Stübchens,
das da liegt im Norden,
starre ich mit leerem Blicke :
Was zieht da so kühle?
Durch die Fensterritze ziehet
Herbsteslüftleins Hauch.
Vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen hab ich
gespürt.

Hat da nicht einer,
hat da nicht einer,
hat da nicht einer was geseh'n?
Vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück,
vom Herbst ein Stück hab ich
geseh'n.
Alter, alter Wetterhahn
auf des Daches Spitze.
Und auf seines rost'gem Kamme :
Was leuchtet so purpurn?
Rot ein Blatt von unserm Wachsbaum,

rot wie's Abendrot.
Vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen,
vom Herbst ein Stückchen hab ich
geseh'n.

ちいさい秋みつけた

だれかさんが　だれかさんが
だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた
めかくし鬼さん　手のなる方へ
すましたお耳に　かすかにしみた
よんでる口ぶえ　もずの声
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた

だれかさんが　だれかさんが
だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた
おへやは北向き　くもりのガラス
うつろな目の色　とかしたミルク
わずかなすきから　秋の風
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた

だれかさんが　だれかさんが
だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた
むかしの　むかしの　風見の鳥の
ぼやけたとさかに　はぜの葉ひとつ
はぜの葉赤くて　入日色
ちいさい秋　ちいさい秋
ちいさい秋　みつけた

AIYAN NO UTA
Lied einer Dienstmagd

AIYANの歌

7 **i. NOSKAI (YUJO)**
Kurtisane

Dort steht die alte Bank
jetzt am Wasserrand.
Woran denkst du wohl?
Schau, die Iris blüht.
Zarter Duft, Abendluft.
Du Frau, so lieb und hold,
schau sie an,
einsam, stille,
schau, die Iris blüht.

i. Noskai (遊女)

堀のBANKOをかたよせて
なにをおもふぞ。花あやめ
かをるゆふべに、しんなりと
ひとり出て見る、花あやめ。

8 **ii. KAKITSUBATA**
Schwertlilien

Am Fluß Yanagawa,
am alten Wassergraben
wachsen Schwertlilien.
Am Tag in zarter Mädchenhand
sie duften und blüh'n.
Abends dann,
bei Saitenklang und Shamisenspiel,
da seufzen sie und weinen
und welken dahin.

Ein roter roter Feuervogelfederkopf
taucht unter Wasser –
und das Feuer ist gelöscht.

ii. かきつばた

柳河の
古きながれのかきつばた、
昼はONGOの手にかをり、
夜は萎(しぼ)れて
三味線の
細い吐息(といき)に泣きあかす。

(鳥(とさか)のあたまに火ん點(ひ)いた、
潜んだと思ふたらちい消(す)えた。)

9 **iii. AIYAN NO UTA**
Lied einer Dienstmagd

O habt Erbarmen!
Übern Gartenweg Abendschatten.
Müde dort läuft die Spinne,
heimlich sich versteckend.
Ja ja, schau die Distel an :
purpurrosa Blütenkopf,
doch tausend Stacheln schillern.
Ja ja, so ist es eben.
O verdammt noch mal!
Dieser Kerl da kann mir nicht treu
sein!
Doch mein, doch mein –
mein Herz ist sein.

iii. AIYANの歌

いぢらしや、
ちゆうまえんだのゆふぐれに
蜘蛛(コブツ)が疲(つか)れて身をかくす、
ほんに薊の紫に
荊(はず)が光るぢやないかいな。
(UNTEREGANのあん沓生はふたごころ。わしやひとすぢに。)

10 **iv. HIGANBANA**
Die Totenblumen

Jungfer, Jungfer,
wohin wollt Ihr geh'n?
Rote Blumen dort am Grabe steh'n,
am Grabe steh'n.
Totenblumen pflücken will auch
heute ich geh'n,
Totenblumen pflücken will auch
heute ich geh'n.

Jungfer, Jungfer,
die Blumen zählt gut!
Hier am Grabe sieben blühen,
sieben blühen,
so rot wie Blut.
Sieben Jahr' war's Kindelein,
das im Grabe ruht,
sieben Jahr' war's Kindelein,
im Grabe ruht.

Jungfer, Jungfer,
vergeßt bitte nicht :
heiß brennet die Sonne im
Mittagslicht,
Mittagslicht,
und eine wächst nach, wenn man
eine nur bricht.

Jungfer, Jungfer,
Ihr weinet so sehr.
Wieviel Ihr auch pflücket, es blühen
noch mehr,
es blühen noch mehr.
Hier am Grabe sieben noch, o große
Not.
Hier am Grabe sieben noch, Wie
Blut so rot.

iv. 曼珠沙華

GONSHAN, GONSHAN 何処(どこ)へゆく、
赤い、御墓(おはか)の曼珠沙華(ひがんばな)
曼珠沙華(ひがんばな)、
けふも手折りに来たわいな。

GONSHAN, GONSHAN 何本(なんぼん)か、
地には七本、血のやうに、
血のやうに、
ちやうど、あの児の年の数(かず)。
GONSHAN, GOSHAN 気をつけな。
ひとつ摘(つ)んでも、日は真昼、
日は真昼、
ひとつあとからまたひらく。
GONSHAN, GONSHAN 何故(なぜ)泣くろ。
何時(いつ)まで取っても、曼珠沙華(ひがんばな)、
曼珠沙華、
恐(こは)や、赤しや、まだ七つ。

11 **v. KIMAGURE**
Laune

Also, er war wieder bei ihr.
Die Sonne scheint,
und es regnet dazu.
O nein – o nein – o nein –
na ja – na ja!

Lebewohl, wie schwer fällt das!

Doch schon kurz darauf
entfaltet sich voller Sehnsucht
wieder die Rose.
O nein – o nein –
na ja – na ja!

v. 気まぐれ

逢ひげ来たちの
日の照り雨がふるわいな。
Odan mo iya, Tinco Sa!

しやりむり別れたそのあとで、
未練(みれん)な牡丹がまたひらく。
Odan mo iya, Tinco Sa!

12 YOIMACHIGUSA
Die Mondblume

Warten, nichts tun als warten,
Kommt er immer noch nicht?
Abend senkt sich auf das Land,
Mondenblume will blüh'n.
Heute nacht, so sagt man ihr wohl,
scheint der Mond nicht.

宵待草

待てど　暮らせど
来ぬ人を
宵待草の
やるせなさ
今宵は　月も
出ぬそうな

13 TUKI NO SABAKU
Durch die Wüste

Sandesmeer
im Mondenschein,
von weit her,
von weit her
schreiten durch Wüstensand
zwei Kamele daher.
Goldene
und silberne
Sattel fei
tragen sie.

Von weit her,
über den Sand
schreiten sie
durch das Land.

An dem gold'nen Sattel fein
hängt ein Krug
silberrein.
An dem Silbersättelein
hängt ein Krug,
goldenfein.
Schleifen –
und Bänderzier,
Sattel, Krug
tragen sie.

Von weit her,
über den Sand
schreiten sie
durch das Land.

Und der gold'ne
Sattelthron
trägt den Königssohn.
Und das Silbersättelein
Königstöchterlein.
Wie der Sand
im Mondenschein :
ihr Gewand,
weiß und rein.

Von weit her,
über den Sand
reiten sie
durch das Land.

Wüstenland,
so leer und weit.
Wüstensand.
Einsamkeit.
Königssohn,
Prinzeßchen schön,
Wohin soll
der Ritt geh'n?
Mond so hell,
sein Licht so rein,
und ihr zwei
so allein
schweigend, still,
über den Sand
reitet ihr
durch das Land.
Schweigend, still,
über den Sand
reitet ihr
durch das Land.

Königssohn,
Prinzeßchen schön –
nur sehr fern
noch zu seh'n.

月の沙漠

月の沙漠を　はるばると
旅のらくだが　行きました
金と銀との　くらおいて
二つならんで　行きました

金のくらには　銀のかめ
銀のくらには　金のかめ
二つのかめは　それぞれに
ひもでむすんで　ありました

先のくらには　王子さま
あとのくらには　お姫さま
乗った二人は　おそろいの
白い上衣を　着てました

広い沙漠を　ひとすじに
二人はどこへ　行くのでしょう
おぼろにけぶる　月の夜を
対のらくだは　とぼとぼと

沙丘を越えて　行きました
だまって越えて　行きました

14, 20 SHIKARARETE
Heimweh

Die Schelte tut weh.
Die Schelte tut weh.
Mich schickt man zur Stadt hinein,
muß Botengänge tun.
Und du trägst das Kindelein,
kannst selber nicht ruh'n.
Am Abend so einsam hier am
Dorfesrand.
Fuchs schreiet klagend her,
so fremd das Land.

Die Schelte tut weh.
Die Schelte tut weh.
Der Mund schweiget trotzig still,
doch weinen wir vor Leid.
Wir beide so einsam hier,
die Heimat so weit.
Zu Hause die Bäume blüh'n in
Tälern und Höh'n.
Über die Berge möcht' ich nach
Hause geh'n.

叱られて

叱られて
叱られて
あの子は町まで　お使いに
この子は坊やを　ねんねしな
夕べさみしい　村はずれ
コンときつねが　なきゃせぬか

叱られて
叱られて
口には出さねど　眼になみだ
二人のお里は　あの山を
越えてあなたの　花のむら
ほんに花見は　いつのこと

15 GYOFU NO MUSUME
Das Fischermädchen

Steht auf sand'gem Dünenrücken
Eine Fischerhütt' am Strand ;
Abendrot und Netze schmücken
Wunderlich die Giebelwand.

Drinnen spinnt und schnurrt das
Rädchen,
Blaß der Mond ins Fenster scheint,
Still am Herd das Fischermädchen
Denkt des letzten Sturm und weint.

Und es klagen ihre Tränen ;
"Weit der Himmel, tief die See

Doch noch weiter geht mein Sehnen
Und noch tiefer ist mein Weh.”

*漁夫の娘

海辺に漁師の小屋がぽつんと立っている、
いちめん砂だらけの砂丘のてっぺんに。
切妻屋根をのせた壁に
夕日と漁網が奇妙な模様を描いている。

小屋の中では糸車がからから鳴って
　糸を紡ぎ、
青白い月光が窓にさしこみ、
かまどのそばで、ひっそりと漁師の娘が
ついこの間の嵐を思い浮べて、
　泣いている。

彼女の涙はこう歎いている——
「空は広く、海は深い、
でも私のあこがれの行方はもっと遥かで、
私の悲しみはもっと深い」
（フォンターネ原詩/西野茂雄訳）

16 AISURU HITO NI
An die Geliebte

Wenn ich, von deinem Anschaun
　tief gestillt,
Mich stumm an deinem heil’gen
　Wert vergnüge,
Dann hör’ ich recht die leisen
　Atemzüge
Des Engels, welcher sich in dir
　verhüllt,

Und ein erstaunt, ein fragend
　Lächeln quillt,
Auf meinem Mund, ob mich kein
　Traum betrüge,
Daß nun in dir, zu ewiger Genüge,
Mein kühnster Wunsch, mein
　einz’ger, sich erfüllt?

Von Tiefe dann zu Tiefen stürzt
　mein Sinn,
Ich höre aus der Gottheit
　nächt’ger Ferne
Die Quellen des Geschicks
　melodisch rauschen.

Betäubt kehr’ ich den Blick nach
　oben hin,
Zum Himmel auf – da lächeln alle
　Sterne ;
Ich kniee, ihrem Lichtgesang zu
　lauschen.

*愛する人に

あなたを眺めることで、深く心がなごみ、
あなたの尊い値打ちに満ち足りて言
　葉もなくいる時
私はあなたのうちにひそむ天使の
ひそかな息使いを聞く思いがする。

そして私の口もとには、いぶかしく、
　もの問いたげな
笑みが浮ぶ、私は夢にだまされている
　のではないのか
私の身のほどを知らぬ願い、ただひ
　とつの願いが
現にあなたの中でかなえられて、永
　遠に私を満足させているとは？

私の心は深く、いよいよ深く沈潜して
　いって、
神々しくひろがる夜の彼方から
歌うような運命の泉のせせらぎを聞く。

胸もそぞろに、まなざしをあげて
天を仰げば、星もみなほほえむ。
私はひざまづく、そのきらめく歌に
聞き入るために。

（メーリケ原詩/西野茂雄訳）
*の２曲はドイツ語の日本語訳です。

17 AWATE DOKOYA
Der allzu hastige Barbier

Der Frühling kam
schon früh in diesem Jahr
zum Flusse her,
wo’s Schilfrohr steht.
Krebs eröffnet sein Geschäft :
“Der Meister Barbier bin ich.”
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

Sein Lehrling klein,
Schaumblasen vor dem Mund,
macht Seifenschaum,
das kann er gut.
Stolz folgt er seinem Meister :
“Meine Schere schneidet gut.”
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

Ein Hase kommt
gehoppelt und gehüpft :
“Als Kunde bin ich bekannt.
Hier schneidet mir de Haare!
Doch Meister, bitte, macht es schnell.”
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

In größter Eil’
der Kunde Hase ist,
der Meister Krebs
Hals über Kopf.
“Nur schnell, nur schnell, beeilt euch!”
Der Laden ist voll Kunden.
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

Es stören sehr
die langen Hasenohr’n,
sie wackeln
stets hin und her.
Schnapp macht die Schneiderschere.
Die Ohren, die sind beide ab.
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

“Wie ärgerlich!”
Der Hase schäumt vor Wut.
Der Meister Krebs
ist jetzt blamiert.
Da ist nichts mehr zu machen.
Der Krebs verzieht sich in sein
　Loch.
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

Da ist nichts mehr zu machen.
Der Krebs verzieht sich in sein
　Loch.
Schnipp schnipp schnipp schnipp,
schnapp schnipp schnapp.

あわて床屋

春は早うから川辺の葦に、
蟹が店出し床屋でござる。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

小蟹ぶつぶつ石鹸を溶かし、
親爺自慢で鋏を鳴らす。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

そこへ兎がお客にござる。
どうぞ急いで髪刈っておくれ。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

兎ア気がせく、蟹ア慌てるし、
早く早くと客ア詰めこむし。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

邪魔なお耳はぴょこぴょこするし、
そこで慌ててチョンと切りおとす。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

兎ア怒るし、蟹ア恥よかくし、
爲方なくなく穴へと逃げる。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

爲方なくなく穴へと逃げる。
チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

18 唄

目が光るのみ、幼き子が唄へば
「蝶々、蝶々」
かくうたへば。

草の間をさやぎて出づる水
また微風の
喜悦の喉。

誰かうたふ、独りならで
遍ねき中に
そが唄を。

はてしなき空のきはみ
在るとなし、光る顔
緑なる幻に。

（ながるる白き野川の水
木も草も
おのづからなる伴奏（ともあはせ）。）

日が光るのみ、幼き子が唄へば
「蝶々、蝶々」
かくうたへば。

（「幻の田園」）

※（　）内の歌詞は歌われておりません。

■ユニバーサル ミュージック携帯サイトへのアクセス方法
◇iモードをご利用の方　i Menu⇒メニューリスト⇒音楽/映画/アーティスト⇒音楽情報⇒ユニバーサル ミュージック
◇EZwebをご利用の方　EZトップメニュー⇒カテゴリで探す⇒エンターテイメント⇒音楽⇒ユニバーサル ミュージック
◇ボーダフォンライブ!をご利用の方　メニューリスト⇒芸能・映画・音楽⇒映画・音楽⇒音楽⇒ユニバーサル ミュージック
■ユニバーサル ミュージックのホーム・ページ　http://www.universal-music.co.jp/

取り扱い上のご注意●ディスクは両面とも、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないでください。●ディスクは両面とも、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形、または接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。　保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用後、もとのケースに入れて保管してください。●プラスチック・ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。